希
のぞみ

希　01

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14751018

ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。twitter/miya_haniwa555
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。主要キャラのほとんどの人はパプニカ王国にいるか、頻繁に集合して、世界中の復興のために頑張っています。ネタバレ満載。アニメ派の方はご注意ください。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ前提でお話が進みます。途中R18に寄り道する予定です(笑)
PixivさまのTwitterリンクは十二国の驍泰アカにルーラしますので、ご注意ください。

希　01

　ポップを好きなメルル。
　ヒュンケルを好きなエイミさん。

　———二人のような感情を、私は抱けるのだろうか？

　ないと、思う。

　自分の慈愛という感情は、実は薄いのではないのだろうか。
　熱い、ヒュンケルが助けてくれたようなマグマのような熱い想い。そんな想いを自分は抱いたことがあるのだろうか？　ない気がする。
　自分の愛というのは公平で平等で、薄まった、自己満足な愛なのではないか。二人を見ているとそんな感情が喉元まで迫り上がってくる。
　今までの自分をすべて否定するような感覚。
　私の想いは間違っていたのではないのか。
　アバンの使徒としての感情であるならば……世界平和を望む感情なら、私の『愛』は間違っていないと、思う。
　でも、私では……きっと二人を幸せに出来ない。
　メルルと、エイミさんのが、二人を……ポップとヒュンケルを幸せにしてくれるだろう。
　———痛い。
　胸が痛い。
　でも、それが真実。
　彼女たちが傍にいるのを許している二人。

それが、なによりの証拠。

ポップへは、すでに気持ちに応えられないことを告げてある。
気持ちはとても嬉しかった。
でも、ダメなのだ。
私では、ただの喧嘩仲間になってしまう。
メルルの前で、頬を染めて照れているポップ。私では、あんな表情を浮かべさせることは出来ない。
すぐ怒鳴ったり、彼らしくない嫌味を言ってきたり、からかってきたり……私相手のポップは、気心の知れた家族に対するような態度だと思う。
でも、そんなことは言えないから……ただ、謝罪をした。
ポップは、私がヒュンケルへの想いを自覚したのだと思ったようだけれど……ヒュンケルの傍にはすでにエイミさんがいる。
心配そうな表情を浮かべるポップに、笑い返すことしか出来ない。
痛い。
心臓が痛い。

今更わかる。
私は、ヒュンケルのことが好きだったのだ……
笑っちゃう。今頃、確信を得るなんて。

マァムは、穏やかになにか話しているヒュンケルとエイミの二人を遠くから見やる。こんな時に視力が良かったことを感謝してしまう。
さわ、さわ、と木々が揺れる。春を過ぎて、夏を迎えそうなこの時期の緑は煌々と輝き美しい。

大魔王バーンとの最終決戦から二年程が過ぎた頃にようやくダイも見つかり、成長した彼はパプニカ城に……レオナの元に帰ってきた。
その後、あの戦いに関わった人達の多くが戦後復興に力を注いできた。まるで駆け足だったここ数ヶ月。世界中を巡って、話し合って、動いて、癒やして……自分に出来る可能な限りで、役に立とうと頑張ってきた。
本当に頑張ったと思う……
もうすぐ私は二十歳を迎える。村を出てから三年以上……
―――母さんに会いたいな。
マァムは二人から目を逸らして、故郷を思う。
懐かしいネイル村。
帰りたい。
……逃げ出したい。
マァムは自嘲の笑みを浮かべると、自分の手のひらをそっと見つめた。

◇

レオナに一人でネイル村に帰ること、その途中の小さな村々を調査していくこと、そのためにルーラは使わずに自分の足で赴くことを告げる。
相談ではなくて報告。
今はまだ、ポップとメルル、ヒュンケルとエイミさん……彼らを笑顔で祝福することは出来ない。でも、時間がきっと解決してくれる。笑顔で兄弟弟子にお祝いを言える日はきっと来る。
相談ではなく報告という形ではあったけど、年下の統率者は怒るでも呆れるでもなく、悲しげに気遣ってくれるだけ。
そのやさしさに、泣きたくなる。
「今夜、発つわ」

「みんなには？」
　今まで、誰かが旅立つ時は壮行会を行っていた。単に盛大に飲み食いをするためのきっかけでしかないが、ヒュンケルに見送られるのだけは……無理だ。きっと、心臓が壊れてしまう。
「……必要ないと思うの」
「マァム」
　自分よりも、レオナの方が泣きそうな顔をしている。なんてやさしい子なんだろう。私の大事な友達。ダイが大切にするお姫様。今は女王様だけど。
「レオナ、そんな顔しないで」
「せめて気持ちを伝えれば良いのに……」
　彼女にまで知られているなんて……私の感情は思っている以上に誰彼構わず伝わっているらしい。でも彼は……
　私の気持ちを噂で聞いているだろう彼がなにも言ってこないのは、私に妹弟子以上の感情がないから。こんなところで彼の気持ちを知ってしまうのは、悲しい。
「自己満足で、彼に迷惑を掛けたくないから」
　この城には私を気に掛けてくれる人たちがいる……そんな人達がヒュンケルにもしも言い募ったりしたら……
　そんな理不尽な負担をヒュンケルに与えたくない。
　せっかく穏やかに笑うようになったヒュンケルの表情を、曇らせたくない。

　ううん、単に怖いのだ。
　彼が、私なんかにこれっぽっちの感情も抱いていないことを知るのが。

「私、自分が思っている以上に弱かったみたい」
　悪戯っぽく笑ってみても、レオナは唇を噛んで涙を浮かべるだけだった。
「涙はダイのために取っておきなさい」

やさしく窘めて、細い女王の体を抱き締める。彼女にこんなふうに気安く出来る人は限られている。自分に、それが許されているのが誇らしい。
大事な妹弟子。
いつも明るくてやんちゃで、とても強い女の子。世界で一番強い女の子。ダイが大事に思う女の子。
「自分の気持ちにケリが付いたら、必ず戻ってくるわ」
「マァム」
「大事な妹が頑張っているんですもの……応援に来る。ただ、今はダメなの……きっと、もうちょっとしたら逃げずに受け入れられるって私は知ってる。だから、ほんのちょっとだけ時間を頂戴」
「……マァム」
レオナは、ただマァムの名前を呼んで抱き付いてきた。涙が溢れて鎖骨の辺りに降り注ぐ。
なんて綺麗な涙。
自分のために泣いてくれた人を大事に思うヒュンケル。
───今なら、あなたの気持ちがわかる。
私も彼のように、この恩に報いなくてはね……
「レオナ、元気でいてね」
「……うん」
幼い子供のような頷きに、マァムはただ黙ったままレオナの頭をやさしく撫でた。

◇

夜になってからの出発。
まるで、悪いことをして逃げ出す人みたいだ。
その発想に笑ってしまう。
後ろ暗く逃げ出すような行動を、自分がまさかするとは……
（真実、夜逃げよね）

沈黙が支配する夜中。頭上には満天の星。まるで私の出発を応援してくれるかのよう。今までの旅は誰かと一緒だったけれど……今日からは己だけになる。誰かに頼ることも依存することも出来ない。

　私の印は愛。

　それは、誰か一人を情熱的に愛する、利己的で独善的な愛ではないのだろう。薄く広く平等に注がれる愛。そんな愛でも、ないよりはあった方が良いと言ってくれる人達がいた。聖母のような天使のような……そんな、自己を投影しない愛。そういう愛でも欲しいという人達に、私は注ごう。

　寒い地方の太陽のような、灼熱の砂漠地方の月のような……水が干上がっている土地の雨のような、そんな愛。

　しんと静まり返る夜の道。

　これが……これから私が進む道。

　アバンの使徒として、世界中の人々が少しでも笑顔になれるように……手の届く範囲の人から掬い上げたい。

　ありがとう、さようなら。私の恋心。

　心臓の上に拳を置く。

　どうか幸せに。

　遠くであなたの幸いを願うから。

　振り返りたい。

　でも、そんな未練を認めてしまえば、私はきっと情けなく彼に想いを告げて迷惑を掛けてしまうだろう。だから、振り返らない。

　足を止めて、拳をさらに強く握り、俯く。

　あなたはやさしい人だから。だから、幸せになっていいの。

　私の知らないところで、どうか幸福に……

マァムは暫くその場に佇んだ後……顔を上げる。
　大丈夫。
　故郷に帰って、ちょこっと泣いて……そうすれば、きっと私は元の私に戻れる。ポップとメルルにも、ヒュンケルとエイミさんにも、きっと笑顔でおめでとうと言える私になれる。
　だって、私はアバンの使徒だから。
　むんと力を入れて、マァムは夜の道を歩き出す。
　私は、強いんだから。
　世界で二番目に強い女の子なのだから。

「……！！」
　ひゅっと息を呑む。
　前方の大木の下に、よく見知った人物。今は、一番会いたくない人。
「マァム」
　大木に背中を預け、腕を組んでいた男はマァムを見つけると……なぜか捨てられた子犬や子猫のような弱り切った目を彼女に向ける。
「ヒュンケル」
　いつもの癖でつい駆け寄ってしまい、マァムは心の中で苦笑を零す。
「見送りに来てくれたの？」
　きっとお節介なレオナが彼に告げてしまったのだろう。
　……あまり隠し事の得意ではない自分の感情は、きっと彼にダダ漏れだったろう。でも、触れて欲しくない。知らない振りをして欲しかった。
　―――私の、告げることも出来ない自分勝手で利己的な感情なんて。

マァムは気持ちを引き締めて笑顔を浮かべ、明るく告げる。
「故郷に帰るついでに、小さな村々の様子を見てくるわ」
　ヒュンケルはマァムの顔を見て戸惑っているようだった。

　……幸せになって。
　遠くであなたの幸せを祈っています。

　言いたくない。

　もちろん、不幸を願っている訳ではないが、自分ではない誰かと彼が笑い合う姿を思い浮かべるのは苦痛でしかなかった。
　胸が痛い。
　気持ちが悪い。
　なんて自分勝手で我が儘で、利己的な感情でもあるんだろう。自分のための愛というものは。
「…………いや」
　こんなふうに言い淀む彼は珍しい。
「ヒュンケル」
「なんだ、マァム」
　やさしい声色に泣きたくなる。
　さようなら、大好きだった人。
「ヒュンケル……あなたは幸せになってもいい人よ」
「マァム」
　私は、あなたの背を押せる人でいたい。
　小さな自尊心。
　あなたが褒めてくれた私でいられるように……
「誰かの幸せは、誰かの不幸の上に成り立っている。それは残酷だけれど事実だわ。たくさんの人を不幸にしたあなたが、幸せを自分から遠ざけようとしていることは知ってる。でもね、たとえ世界中の人が願わなかったとしても、私だけは願うわ……ヒュンケル、あ

なたが幸せであることを」
　言った。
　言えた。それだけでマァムは自己満足に浸る。
　笑顔で言えたかはわからないけれど。
「オレが……幸せであることを」
　マァムの言葉を繰り返した後、ヒュンケルは黙り込む。
　……もしかしたら、自分に願われるのすら厭なのだろうか？
　そんな卑下が浮かぶ。
　五歳上で、いつも前を見据えて突き進んでいく人。
　本当はとても繊細で不器用な人。
　見えにくいけれど愛情深くやさしい人。
　この人は、もっと幸せになってもいい人だ。
「ええ」
　今度こそ、笑顔で答えられた。
　そう、幸せになっていいの、あなたは。
　そんな想いを込めて笑う。
　同じアバンの使徒として、彼の幸福を心から願う。その気持ちに嘘はない。
「さようなら、ヒュンケル」
　素直に言葉が出た。
　ありがとう。大好き。すべての気持ちをこの言葉に込めて、マァムは告げる。さようなら、大好きだった人。
　遠くで見守っています。なんて、言えはしないけれど。
　臆病な私は、彼の姿を見ることすら出来ないだろう。
　微笑んで見上げれば、ヒュンケルは表情をなくしていた。顔面が真っ白になっている。
「ヒュンケル？」
　体調が悪いのだろうか……そんな体調で私なんかの見送りになんて来なくてもいいのに。
「ヒュンケル、顔色が悪いわ。城に戻って……」

　広い胸に抱き竦められる。

強く抱き締められて声が出ない。
「嫌だ」
「え？」
「さよならなんて、嫌だ」
　小さな駄々っ子のような言い方に息を呑む。
　強い力。
　あたたかな体躯。
　彼が荒い呼吸をしていることが、わかる。
「オレは……」
　彼らしくなく言い淀む姿にマァムは困惑する。
　―――こんなことをされたら、期待をしてしまう。
「ヒュンケル……」
　マァムはあたたかな彼の身体を抱き返す。ほんの少しの思い出くらい欲しても許されるはずだ。そんな甘えた考えで抱き返し、マァムは深呼吸をする。
　ありがとう、レオナ。
　最後に思い出をくれて。
「……永遠にお別れする訳じゃないわ。また会うためのさようなら、よ」
　密着していた体を離して、見上げて微笑む。
「もう、行くわ。わざわざ見送りに来てくれてありがとう。あなたの幸せを祈っている」
　言えないと思ったけれど、言えた。
　マァムはそのことに満足して、彼の腕の呪縛を自ら解く。
　居心地のいい、あたたかな腕の中。
　でも、ここは私の居場所じゃない。わかってる。だから、笑うの。
「祈らなくていい！」
　再び強く言われて腕の中に戻される。
「オレの幸福を祈ると言うのなら、傍にいてくれ……マァム」
「……ヒュンケル？」
「オレでは、お前を幸福に出来ない……そう思うからこそ、この気持ちを告げる気はなかった……だが、敢えて言わせてくれ」

ヒュンケルはマァムの両肩を掴んで目を合わせる。
「マァム、愛している」
　その言葉にゆっくり瞬く。
　理解ができない。
　愛して、いる？
　誰が、誰を。
　マァムは、微動だにせずに見開いた目をヒュンケルに向ける。
「おまえの幸せを望んでいる……そんなオレに、幸せを望んでくれる。それは、オレと一緒にいることをマァムも望んでいると解釈してもいいか？」
　眉尻を下げて困ったように言う姿に胸が苦しくなる。
　再び胸の中に抱かれて、マァムはようやく呼吸を思い出す。
「え？」
　目を閉じられない。
「ぇぇえええ！？」
　間の抜けた声が漏れてしまう。
「ええ！？」
　僅かばかり緩められた腕の中、顔を上げれば微苦笑を浮かべ、ヒュンケルが困ったように見下ろしてくる。
「エイミさんは！？　ヒュンケルは彼女のことを好きなんでしょう？　だから傍にいることも許していたんでしょう？　一緒に旅をしたのも……え？　え？　だって……」
　あまりのことに混乱して、もう言葉が出てこなかった。
　涙が一雫。
　だって、だって……エイミさんが、ヒュンケルを好きだから。ヒュンケルはエイミさんが傍にいることを許しているから……だから、私は必要がなくて、想うのは許されなくて。
　だって……
「それでもオレの心の中にいた女性は、マァムだけだ」
　思ってもいなかった告白に、マァムは口をぽかんと開ける。
「なぜそんな誤解をしていたかは知らないが、オレとエイミの間には何もない」
　酷い言い様に涙が溢れる。

あんなに、エイミさんはヒュンケルのことを想っていたのに……
　ああ、愛ってこんなに辛いんだ。いくら想っても想いが返ってくるとは言い切れなくて、端から見ていたらそうだと思っていたことが本人にとっては違っていて。こんなふうに傷付けて、傷付けられて、でも本人にはわからなくて……
　きっと、こんなふうに泣くのは……迷惑なんだろう。
　でも、涙が溢れて止まらない。
「……いや、何もなかった訳じゃないな……オレが、今この想いを告げることが出来るのは彼女のおかげかもしれない……ただ男女としては、オレからは何もない」
「ヒュンケル……」
　想われても、受け入れるかどうか決めるのは想われた本人次第。
　私に泣く資格なんてない。
　わかっているけれど、涙が止まらない。
　何も告げずに、逃げようとした私はなんて卑怯なんだろう。
　拒絶されるかもしれない恐怖に立ち向かって、想いを告げた彼女たちは尊敬に値する。
　――――私は、ずるい。
　困惑気味のヒュンケルの両頬を手のひらで覆う。
「私も、ヒュンケルが好き……愛してる」
　自分が言うと、なんて軽くなってしまうのだろう。
　だけど、言いたい。
　我慢なんて、もうしたくない。
「気が付くのが遅かったから、あなたには別の人がいるって勝手に決め付けて逃げ出そうとして……そんな卑怯な私だけど、でも、あなたが好きなの」
「オレもだ。他力本願でお前の幸せを願う卑怯者だが……お前が好きだ」
「ヒュンケル」
「マァム」
　お互いの名前を呼び合って、抱き締め合う。
　広くてあたたかい胸に頬を寄せて、目を瞑る。
　とくとくと時を刻む鼓動に安堵する。

やさしく頭を撫でられる。きっと、小さな頃に彼がお父さんから撫でられた時と同じ手つきなのだろう。
　私がこの想いを告げて、そして彼の想いを受け取れば傷付く人たちがいる。知っている人、知らない人、きっと多くの人が……彼はとてもモテるから。
　でも、もう譲れない。
　この利己的な愛は、たった一人にしか捧げられない。
　――――捧げたくない。
　だから……
「ヒュンケル」
「マァム、オレと結婚して欲しい」
　端的に告げられた言葉に息を呑む。
「……言おうと思ったのに」
「それは、先に言えて良かった……で、返事は？」
　わかっている癖に……そう思ったけれど、マァムは笑う。
「嬉しい。私、あなたのことを幸福にするわ」
　マァムの涙の筋が浮かぶ満面笑顔の断言に、ヒュンケルが息を呑む。
「ああ……オレも、善処する」
　その言い方に声を上げて笑ってしまう。
　すぐに暗い方へ暗い方へと進んでしまう彼。
「大丈夫。あなたが地獄に行くなら私が掬い上げるし、魔界へ行くなら鍛えて同行する。お詫び行脚するなら一緒に私も償うわ。だって、あなたが改心した切っ掛けは、私なんでしょう？　私がいつだって光の方へ導いてみせる！」
　むんっと拳を握り締めて笑いかければ、ヒュンケルは目を見開いて、それから顔を横に逸らして吹き出した。
　笑わせることに成功したらしい。
「頼もしいな、オレの奥方は」
　笑いながらヒュンケルが言う。
　頼もしい。
　その言葉が嬉しい。
「任せて、旦那様」

嬉しくて嬉しくて目の前の体に抱き付けば、笑いながら抱き返してくれる。
「そうだな……動物を拾ったら最後まで面倒を見るのは当たり前だという……よろしく頼む」
　くつくつと笑う声が耳元に届く。
　ヒュンケルは動物ではないと思うが、闇の世界にいた彼を引っ張り上げたのが自分だと言うのなら、その責任は自分が取るべきなのだろう。そんな言い訳に笑ってしまう。
「ある種の鳥の子供は、最初に見たものを親だと思うらしいが……オレにもそういう機能があるかもしれない」
　くすくすと笑う声がくすぐったい。
「ヒュンケルは、子供じゃないわ」
「……わかっている……だが、オレにとっては女性はマァムしかいないんだ」
「嬉しい」
　逞しい体に抱き締められて、抱き締め返して……なんて幸せなんだろう。
「私、こんなふうにぎゅってされるだけで充分幸せよ」
「ああ、オレもだ……」
　暗い夜の道、大木の下で抱き締め合う二人が周囲の違和感に目を合わせる。

　すると……

「「「「「おめでとー！！！」」」」」
　周囲を見知った人々が取り囲む。
　ルーラやトベルーラで現れたらしい。
「マァム！！」
「レ、レオナ！？」

マァムがヒュンケルに抱き締められていることなど気にすることもなく、レオナがマァムに抱き付く。ヒュンケルから奪い取るような形になっているが、レオナは気にしていないし、ヒュンケルは肩を竦めるだけだった。
「この！この！この！！」
そのヒュンケルを、ポップが肘鉄を食らわす。ヒュンケルからすれば非力な彼の全力の肘鉄など痛くはないが、鬱陶しい。
「よかったなぁ、ヒュンケル！　目出度い！！　マァム、どうしようもない男だがよろしく頼む」
「お前さんは花婿の父か、クロコダイン」
バダックががはがはと笑っている。
混沌。
何が起きたかわからない二人が揃って目を瞬（しばたた）かせているとレオナがアポロに目配せをして、荷物をヒュンケルに渡させていた。
「三ヶ月後に、ヒュンケルとマァムの結婚式をパプニカ城で執り行います！！」
「えぇ！？」
レオナの宣言に吃驚した声を上げたのはマァムだけで、知っていたのかとヒュンケルを見やれば、彼は吃驚して言葉をなくしていた。こんなふうに目を見開いて驚いている彼は珍しい。
なんだか可愛らしい。
「ネイル村に迎えに行くから。それで、ルーラでこちらに戻って準備して、それから結婚式ね！　マァムのお母さんにも来てもらうのよ。それ以外の人を呼びたい場合は要相談ね」
「ヒュンケル殿、視察をご依頼したい村々はこの地図に記載されています。だいたい一ヶ月程で周り切れるかと……荷物は不足分があるかと思うので金貨を多めに入れています。後、これは姫からの伝言と依頼書、諸々入っています」
「……わかった」
どうやら、マァムが向かう予定だった旅路は一人旅から二人旅に姿を変えて、続行するらしい。
やや離れたところにいるエイミに気が付いたマァムが会釈する。

声なんて、掛けられない。それに気が付いたヒュンケルも小さく目を伏せて会釈した。彼女も小さく会釈を返してくれる。
　周囲もそれには気が付かない振りをして、ようやく両思いになった二人に歓声を上げた。
「婚約者と婚前旅行！！　素敵ね！」
　レオナのはしゃいだ声に、アポロやマリン、メルルが懸命にレオナの暴走を止める。ダイはそんなレオナをやさしい瞳で見つめていた。
「ウェディングドレスやベールの話もしたいから、絶対に一ヶ月半後にはネイル村にいてね！」
　レオナがどんなドレスやアクセサリーにするか、復興した教会の中で相応しいのはどこかなどマァムに怒濤の勢いで話している間、ヒュンケルはポップやチウ、ラーハルトたちにからかわれているようだ。
　一通り騒いだ後、彼らはまた来た時と同様にあっという間に消え去っていた。
　沈黙が支配する夜。
　しばらくして、ようやくマァムは人気のない夜空を見上げる。
「……吃驚過ぎて、上手く喋れなかったわ」
「同感だ」
　満天の星が煌めく夜道に残された二人は、先程の喧噪が嘘のような静けさに戸惑っていた。
　遠くで鳥や木々がさざめいているのが聞こえる。
「行く前に少し確認をしてもいいか……」
「ええ」
　ヒュンケルがアポロに渡された手紙のような書類のような束を確認している。とても苦い薬草を噛み砕くような顔をしている。今にも舌打ちをしそうだ。
「ヒュンケル？」
「姫の……旅路の命令書だ」
「命令書？」
　首を傾げる。私にはそんなこと言わなかったのに……
「とりあえず次の街で指定の場所を訪ねろと書かれているから、そ

れに従うか……装備とかも一度街で確認したいしな。かまわないか？」
「ええ」
　ヒュンケルは命令書を仕舞うと苦く笑う。
「これはマァムには見せるなと言明されている」
　何を考えているのだろう、レオナは……
　だが、あの悪戯好きな彼女のことだ。きっと次の街で吃驚するような仕掛けがされているに違いない。
　きっと抵抗しても無駄だろう。
「わかったわ……困った妹ね」
「そうだな」
　ヒュンケルがくすりと笑う。
　力が抜けた笑みに頬が熱くなる。これからは……ずっと笑ったり困ったり怒ったりする彼を近くで見られるのだ。
　悲しい顔は見たくないけれど。
　ううん、悲しい顔をさせるようなことは私が遠ざけてみせる。
　拳を握ってむんと誓っていると、ヒュンケルがその拳を大きな手のひらで覆う。そして、自然と手を繋げられる。
「行くか」
「ええ」
　一人で進むと思っていた満天の夜道を、二人で歩く。

おしまい